アポリネール、恋愛書簡の機能

ルーとマドレーヌへの手紙

伊藤 洋司

序

詩人ギヨーム・アポリネールが 1914 年から 1916 年にかけて、まずルーすなわちルイーズ・ド・コリニー＝シャティヨンに、次にマドレーヌ・パジェスに書き送った大量の恋愛書簡を考察したい。しかし、そのスキャンダラスな恋愛言説や、書簡詩の存在などが示す文学性は、ここでは論じられない。どんなに文学性が豊かであれ、手紙は何よりもまず文通というコミュニケーションの機能を担ったテクストである。この論文では、この機能に着目しながら、アポリネールの恋愛書簡が確立する文通関係を分析してみたい[1]。

I. 書簡契約

アポリネールはこの二人の女性との文通において、単に手紙を交換するだけでは満足せずに、その書き方に関して詳しい取り決めを相手と結んでいる。1914 年 9 月末、ニースで詩人はルーと知り合い文通を始めるが、12 月に、彼が志願兵として入隊して二人が離れ離れになると、初めて明確に文通の取り決めが成立する。マドレーヌとは 1915 年の正月に列車内で知り合った後、手紙のやり取りだけで 8 月の婚約にいたるのだが、文通の最初の段階から詩人は細かく取り決めを結ぼうとしていた。文通関係の基盤であるこの書簡契約を検討することによって、この関係の特徴を明らかにしてみたい。

二人の女性との文通における最も重要な契約の条項は、毎日手紙を書くことである。これは恒常的な条項ではないが、アポリネールは強い執着を示している。1914 年 12 月 16 日から、彼とルーは毎日手紙を書き始める。ルーの

---

[1] この論文は、次の書物の第一部で展開された議論に基づいている。Yoji Ito, *Apollinaire et la lettre d'amour*, Editions Connaissances et Savoirs, 2005.また、この論文では次の二つの略号を特別に使用した。*LL* : Guillaume Apollinaire, *Lettres à Lou*, préface et notes de Michel Décaudin, Gallimard, coll. « Soleil », 1969. *LM* : Guillaume Apollinaire, *Lettres à Madeleine, tendre comme le souvenir*, Gallimard, 2005.

旅行に伴い翌年の 2 月初めから文通の頻度は減るが、1915 年 3 月 28 日にマルセイユで恋愛関係が事実上の破局を迎えた後、詩人は再び毎日手紙を書くようになる。しかし、6 月初めから手紙が減りだし、一日、週に 2 回の手紙という条項を結び直すものの、9 月中頃に詩人は規則的な文通を完全に断念するのだ。一方、マドレーヌとの文通は、1915 年 4 月に最初の手紙が書かれた後、急速に頻度が高まっていき、8 月に婚約が成立した後、二人は毎日手紙を書きあうようになる。しかし、1915 年末から翌年にかけての休暇での再会を経て、2 月中頃になると詩人の手紙が減り始めるのだ。ルーとの文通では、女性の側の不実さが毎日の文通を困難にした。だがマドレーヌとの文通では、文通相手は忠実で、関係の最後の段階で詩人が自らこの条項を破るのである。

毎日手紙を書くことは、アポリネールの恋愛書簡の特徴的な条項であり、彼が他の文通相手とこの条項を定めることは一度もない。この条項は、規則的に手紙を書くという条項の変形であり、手紙の不在に起因する不安を一掃することが最大の目的である。しかし、戦場では郵便の配達はしばしば理不尽に遅れ、彼女たちとの文通において、詩人がこの不安から解放されることは決してない。

もう一つの重要な条項は、長い手紙を書くことである。入隊するとアポリネールはルーとこの条項を結ぶが、手紙が頻繁にそれに言及するのはマルセイユでの破局の後だ。ルーはもう短い手紙しか書かず、特に 1915 年 6 月以降、この条項は全く機能しなくなる。マドレーヌとの文通では、この条項はより有効だ。だが、休暇で二人が再会し 1916 年に入ると、詩人の手紙は以前より短くなり、3 月 17 日に頭部を負傷した後、彼はごく短い手紙と電報しか送らなくなる。長い手紙は読書の快楽を増やし、また親密な関係の証ともなるが故に重要だ。長さへの欲望は詩人の多くの文通に存在するが、これほど長い手紙を書き合うことは他になく、この点で、この条項は彼の恋愛書簡に特徴的なものだと言える。

手紙の内容に関する条項のなかで最も重要なのは、全てを書くことと、真実を書くことである。後者は前者の変形とみなせる。アポリネールは、ルーが特に男性関係に関して何かを隠しているのではないか、嘘を書いているのではないかと常に疑っている。そのため手紙のなかで、この二つの条項を守ることを彼女に繰り返し頼むのだ。マドレーヌとの文通においてもこれらの条項の重要性は変わらないが、詩人は誠実な彼女に対して、ルーに対するほど頻繁にこれらに言及する必要を感じていない。ところで、真実を書くこと

は、ほとんど全ての文通において暗黙の前提である。一方、全てを書くことは、ごく親密な文通相手にしか要求できないことだ。後者はアポリネールの恋愛書簡の特徴的な条項であり、彼の他の文通でこの条項が成立することは一度もない。

手紙の内容に関するもう一つの重要な条項は、手紙に、質問に返事をすることである。全ての手紙、全ての質問にすぐに返事をしなければならない。ルーとの文通において、この条項は何よりもまず、相手が自分の手紙を読んだことを確認するために結ばれるのだが、ルーはこれをしばしば破る。一方、マドレーヌとの文通において、この条項は、コミュニケーションをより確実にすることを第一の目的にしている。戦場での郵便の配達はとても遅く、時に不規則なので、忠実な彼女に対してもこの条項が必要になるのだ。女性詩人、ジャンヌ＝イヴ・ブランとの同時期の文通でも、この条項が書簡契約として定められていることに注意しよう。この条項はアポリネールの恋愛書簡に特徴的なものではないのだ。

書簡契約の主要な条項は以上の通りであるが、ルーとの文通とマドレーヌとの文通では条項がほぼ同じであることに注意しよう。このことは、詩人が二人の女性に対して、同じアプローチで、同じ欲望を持って手紙を書いていたことを示している。しかし契約の履行に関しては対照的で、ルーはしばしば契約を尊重せず、マドレーヌは忠実だった。この違いが、二つの文通を別の方向に導いたのだ。

最後に、書簡契約に関する言説の特徴を指摘しておこう。どんなに情熱的に愛情が語られようと、文通の基盤は書簡契約であり、手紙はこの契約について思考し続ける。けれども、書簡契約についての言説は偏在し、特に、マルセイユでの事実上の破局以降に書かれたルーへの手紙のなかで、この言説は頻繁に登場する。ルーが契約を守らないので、詩人は繰り返し契約に言及しなければならないのだ。契約に違反する時、契約についての言説が現れる。逆に、違反のいかなる可能性もない時には、人は契約について語らないだろう。

二人の手紙の書き手が同じ態度を共有していないことが、手紙を書簡契約についての思考の場にするのだ。とはいえ、たとえマドレーヌのように忠実な書き手であっても、二人の異なる人間が文通をする以上、二人が最初から手紙に対して全く同じ態度を共有していることはあり得ない。手紙の書き手は自分と異なる他者に出会う時、書簡契約を検討する。書簡契約に関する言説は、他者とのコミュニケーションの困難な過程を記しているのだ。

II. 「僕」と手紙

手紙は、送り手（書き手）が受け手（受取人）に向けて書いたテクストである。従って、このテクストが持つコミュニケーションの機能を明らかにするには、手紙の本質的な登場人物であるこの二者を分析することが必要だ。そこで、ここではまず、一人称の「僕」によって指示される送り手を考察してみたい。

手紙の「僕」は小説の「僕」と違って現実の執筆者を指示しているが、それでもテクストの産物であり、実在する人物との間には必ずずれがある。アポリネールはルーとマドレーヌの署名の変化に敏感であり、署名とともに書き手の人格が変わることに意識的だ。彼自身、手紙で複数の署名を使い分けており[2]、家族などへの手紙では本名で署名し、他の大部分の手紙では筆名で署名している。前者は後者より私的な性格を明らかに強く持っている。ルーとマドレーヌへの手紙は、どちらも当初ギヨーム・アポリネールと筆名で署名されていたが、すぐに関係の深まりとともにギーと署名されるようになる。このギーという署名は筆名による署名の変形であるが、他の文通相手には決して用いられない。従ってこの署名は、彼女たちとの文通が占める特別な位置を示しているのだ。

ただし、同じ署名を用いていても、この二つの文通では「僕」の人格に微妙なずれがあることに注意しよう。例えば、同じ日に、詩人はマドレーヌに戦地の「ぞっとする恐怖」（1er juillet 1915, *LM*, p. 70）について書くが、ルーにはこの感情を否定し、「極めて満足している」（1er juillet 1915, *LL*, p. 453）と主張する。また、塹壕の訪問という同じ出来事を語りながら、詩人はルーには塹壕のエロティックな落書きについて触れ（1915 年 4 月 16 日）、マドレーヌにはそれを無視して、そこでの軍人たちの読書を説明している（1915 年 5 月 11 日）。後者への手紙の「僕」は前者への手紙の「僕」よりしばしば知的なのだ。さらに、彼は 1915 年 7 月 30 日に、過去の恋愛を告白する感動的な手紙をマドレーヌへ送るが、同じ日のルーへの手紙ではエロティックな空想をして楽しんでいる。このように手紙の「僕」は演出されており、それぞれの文通に適した存在となっているのだ。

語りの観点から、「僕」は語り手の「僕」と主人公の「僕」に区別されうる。語り手の「僕」は自分が主人公である物語を語り、時にそれを注釈した

---

[2] アポリネールの手紙の署名については次の論文の議論を参照せよ。Claude Debon, « Fils de personne », in Jean Burgos, Claude Debon et Michel Décaudin, *Apollinaire, en somme*, Honoré Champion Éditeur, coll. « Littérature de notre siècle », 1998, pp. 81-82.

り感情を表明したりするが、聴き手の「君」と関係を確立し維持することもその重要な機能のひとつである。語り手と主人公は、手紙の細部においてあらゆる種類の時間的関係を持つが、その最も特徴的な関係は、昼間の出来事を夕方に語るなど、「僕」がごく近い過去にしたことを語る時に現れる。この場合でも語り手と主人公は区別されうるが、そのずれはごくわずかであり、この小さなずれが両者の関係を極めて微妙なものにするのだ[3]。語り手と主人公は、時間的関係の変化とともにある時は離れある時は一致するが、常に後者は前者によって演出されている。

主人公の「僕」は、恋人、詩人、兵士、手紙の書き手など、様々な姿をまとって現れるが、恋愛言説や文学的活動に関わる最初の二者にはここでは触れず、兵士、手紙の書き手としての「僕」にのみ注目したい。

ルーとマドレーヌへの手紙は、アポリネールの戦争体験の貴重な記録となっている。1914 年 12 月 6 日に彼はニームの 38 砲兵連隊に入隊し、教練を受ける。1915 年 4 月 6 日に戦地に到着し、連隊の 45 中隊に合流する。11 月 18 日に彼は昇進のために自ら志願して歩兵 96 連隊に配属され、その 6 中隊に入って 28 日に最前線に行き厳しい日々を過ごす。年末年始の休暇の後、彼は戦争に疲れ切った様子を隠さず、1916 年 3 月 14 日にビュットの森の最前線に行く。17 日に砲弾の破片で頭部を負傷し、彼にとっての戦争が突然終わる。このように、アポリネールは絶えず昇進を求めて次第に大きな危険を冒していくが、「本当の思考のない、自動人形」（23 février 1916, *LM*, p. 435）のように感じつつ軍隊生活を終えるのだ。

「僕」のこの兵士の顔は、確かに恋愛書簡にとって不可欠な要素ではない。しかし、恋愛言説や詩的企てにおいても、この顔は常に存在し続けている。そもそも戦争がなければ、ルーやマドレーヌとこのような文通関係が築かれることは決してなかっただろう。この意味で戦争は、恋愛書簡の単なる背景を超えた重要な役割を果たしていると言えよう。

手紙の書き手の「僕」は、手紙の物語の登場人物、主人公だけでなく、語り手でもありうる。この「僕」の顔は一見地味であるが、決して「僕」の副次的な側面ではない。恋愛書簡において、アポリネールは手紙を書きつつある自分を描写する。彼は戦場で手紙を書く際の劣悪な条件を説明し、手紙を書く場所と時間もしばしば記す。また、詩人は相手の手紙を読む自分も描写している。手紙を読む時間は、書く時間と違って語りの時間に属さず、従って、読む「僕」は語り手の「僕」からある短い時間的距離によって隔てられ

[3] Voir Gérard Genette, *Figures III*, Éditions du Seuil, coll. « Poétique », 1972, p. 230.

ている。手紙を読む描写は書く描写ほど具体的ではないが、幸福感に駆られて何度も読み返すといった、激しい感情の表出が特徴的だ。さらに、詩人は手紙の配達や保管にも言及する。手紙の書き手の「僕」は、執筆だけでなく文通のあらゆる段階を語り、その描写を通して手紙と文通関係を考察しているのだ。

手紙は手紙を語る。手紙の書き手の「僕」はこの手紙の自己表象を通して現れる。この「僕」の顔が重要であるのは、例えばランダ・モリナ・ダ・シルヴァに宛てた若き日のアポリネールの長い手紙を読めば明らかだろう[4]。この恋愛書簡で、詩人はほとんど手紙のことばかり話しながら彼女に言い寄っているのだ。ルーとマドレーヌへの手紙でも、この「僕」の顔は絶えず現れて手紙について語る。自分が本当に直面しているのは文通相手ではなく手紙であることを、「僕」は知っているからだ。愛を語る「僕」の陰に、自分と手紙の関係を考察する「僕」が常にいる。手紙というテクストに固有の産物である後者の「僕」は、アポリネールの恋愛書簡において、文通の基盤に関わる重要な役割を果たしているのだ。

III. 「君」と文通関係

次に、二人称の「君」によって指示される手紙の受け手、受取人を考察したい。「君」とはどのような存在だろうか。また、「僕」は「君」とどのような関係を結ぶのだろうか。

手紙の受取人は最初「あなた」（vous）と呼ばれ、やがて「君」（tu）と呼ばれるようになる。ルーへの手紙では、この変化はアポリネールが入隊する 1914 年 12 月に起こる。マドレーヌへの手紙では、二人の婚約が成立する 1915 年の 8 月後半から「君」が現れ始め、9 月初めに完全に「君」に移行する。受取人は人称代名詞だけでなく名前、愛称によっても呼ばれる。特に、手紙の冒頭での様々な呼称は興味深い。ルーへの手紙では、この呼称の大部分は「ルー」、「僕のルー」など名前を用いたものだ。一方、マドレーヌへの手紙では、呼称の大部分は「妖精」、「僕の愛する人」、「マドレーヌ」という三つのタイプのどれかに属している。婚約前は第一のタイプの呼称が

[4] Voir la lettre à Linda Molina da Silva du 3 juillet 1901, *Correspondance*, dans *Œuvres complètes de Guillaume Apollinaire*, édition établie sous la direction de Michel Décaudin, André Balland et Jacques Lecat, 1965-1966, 4 vol., t. IV, pp. 709-710.

多く、婚約後は第二のタイプが多い。このように受取人の呼び名は多様であり、書き手との関係の変化とともに変わるのだ。

「僕」同様、「君」も実在する人物を指示しているが、それでもあくまでテクストの産物である。この「君」は語りの観点から、聴き手の「君」と登場人物の「君」に区別されうる。言葉が「話し手と聴き手の相互作用の産物」であり、「自己と他者の間にかけられた一種の橋[5]」であることを思い出そう。言説の性格は「僕」と同じくらい「君」によって決定されるのだ。ルーへの手紙とマドレーヌへの手紙では言説は当然変わり、この意味で、聴き手の「君」は手紙の言説に本質的な影響を及ぼしているのである。

「君」は、「僕」が語る物語の聴き手であるだけでなく、その登場人物でもありうる。文通相手は出会いと手紙という形で文通者の生活に介入し、文通者は相手のこの現実の介入を自分自身の手紙のなかで語る。例えば、アポリネールは休暇が終わるたびにルーとの再会を長々と熱心に語っている。マドレーヌに対しても、彼は電車での出会いと休暇中の再会を語るが、ルーに対する時のほうが明らかに雄弁である。手紙という形での介入はより日常的で、その手紙に対する「僕」の返事を通じて、「君」の物語が浮かび上がってくる。返事を通じて描き出される二人の女性の性格や生活は対照的だ。貴族の血筋を引くルーは、トゥトゥという別の恋人や他の多くの男たちと遊んでいる。一方、アルジェリアに家族と一緒に住むマドレーヌは教養があり、貞淑な生活を送っているのだ。

「僕」は、出会いや手紙に基づかずに「君」の行為を想像で語りもする。例えば、詩人は愛する女性との近い将来の再会を語り、彼女がその時することを想像する。彼はこの想像の実現を望んでいるが、しばしば現実に裏切られることになる。彼はまた時々、文通相手の現在の行動を純粋に想像する。さらには、ルーとの関係の破局後、詩人は彼女がもう戻らないことを知りながら、彼女との性交渉を空想し続ける。この時彼は空想に溺れているのであり、その実現はもう問題ではないのだ。こうした想像上の「君」は、「僕」が自身の欲望に従って創造した存在にすぎず、他者ではない。登場人物の「君」は、このように現実と想像の両方から、「僕」の外側と内側の両方から生じる複合的な存在なのである。

---

[5] Mikhail Bakhtine, *Le Marxisme et la philosophie du langage, essai d'application de la méthode sociologique en linguistique*, préface de Roman Jakobson, traduit du russe et présenté par Marina Yaguello, Les Éditions de Minuit, coll. « Le Sens commun », 1977, pp. 123 et 124.前者の引用は、原文ではイタリックで強調されている。

「僕」と「君」が結ぶ文通関係について考えてみたい。ここでは、文通関係を郵便の「物質的」な交換によってのみ保障される絆と定義し、「精神的」な絆である恋愛関係と区別する。「君」は「僕」の手紙の受取人だけでなく、「僕」への手紙の書き手でもあり、二人は手紙を交換しながら文通関係を結ぶ。恋愛関係が成立するのも、この文通関係の枠組みにおいてのことだ。「君」が示す様々な顔のうち、手紙の書き手の顔が無視できない位置を占めるのは当然のことだろう。「君」のこの顔が文通関係の成立に不可欠なためである。

文通関係は手紙の交換だけでなく、他の様々なものの送付によっても維持される。第一次世界大戦のフランス軍兵士にとって、後方からの荷物の到来は何より嬉しいもののひとつであり、アポリネールもいつも心待ちにしていた。愛する人が彼に送る最も重要なものは写真だ。ルーはエロティックな写真を送って彼を喜ばせる。電車での出会いのほのかな記憶をもとに始まったマドレーヌとの文通では、彼女の写真はことのほか重要である。一方、詩人が愛する人に送る最も重要なものは指輪だ。1915 年の 4 月から 12 月にかけて、彼は他の兵士たちと同様アルミニウムの指輪作りに熱中し、いくつもの手製の指輪を送る。詩人が文通相手に本を送ることも頻繁だ。彼は特にマドレーヌに、自分の詩集や自分の記事が載っている雑誌、また他の様々な本や新聞を送っている。これらは主に保管のために送られるのだが、相手に読んでもらうためでもある。他にも数多くのものが詩人と文通相手の間を絶えず行き来する。あるものは贈り物であり、別のものは保管のために送付されるのだ。このように、「僕」と「君」は郵便物の絶えざる行き来によって密接に結びつく。「君」は、それらが行き来する二つの極の一方として表象されるのだ。

最後に、「君」の重要な性格を指摘しよう。今まで述べたように、「君」は手紙にとって不可欠な人物であり、決定的な役割を担っている。しかしそれにもかかわらず、アポリネールの恋愛書簡における「君」の表象は謎めいている。何故なら、「君」は常に不在だからだ。「僕」が手紙を書く時、「君」は存在せず、長い距離が二人を隔てている。手紙を書く時間と読む時間は常にずれ、二人は手紙によって同じ時間を共有することさえできない。手紙は不在者との会話、孤独な魂の鏡なのだ。詩人はルーへの書簡詩「歩哨」で次のように歌う。「愛の神よ、あなたは不在が何か知らない／それに死ぬ思いをすることを知らない」（25 mars 1915, *LL*, p. 211）実際、不在はアポリネールの恋愛書簡の最も重要な主題のひとつだ。マドレーヌへの書簡詩「嘆き」で、彼は歌う。「僕のマドレーヌよ　君は実在するのか／それとも孤独に住

まわせるために／僕が心ならずも創造した存在に過ぎないのか」（8 octobre 1915, *LM*, p. 234）「君」が実在の人間ではないことに、詩人は気づいている。「君」は常に不在であり、それ故その表象は亡霊のような性格を示すのだ。

IV. 第三者と文通社会

「僕」や「君」と違って、第三者は手紙に不可欠な登場人物とは言えない。しかし多くの場合、第三者は様々な形で文通に関わりながら手紙の網、文通社会を形成している。ここでは、そのような第三者を考察してみたい。

郵便業務は人物ではなく制度だが、アポリネールの恋愛書簡における最も重要な第三者である。これなしには彼の文通は成立せず、彼は絶えずこの制度に言及する。しかし、戦場での郵便配達は遅く不規則だ。例えば、1915 年 4 月に、配達の遅れにより彼はしばらくルーの手紙を受け取らず、絶望に陥ってしまう。このように、郵便業務はその必要性にもかかわらず、多くの場合文通を混乱させる否定的なものとして表象されるのだ。また、人物としては郵便担当下士官のみが登場するが、詩人の描写が彼らに人格を与えることはほとんどない。だが、彼らの到来は常に歓迎すべきものとして詩人の手紙に表象されている。

軍隊による手紙の検閲は、文通の私的なコミュニケーションにとって大きな障害である。アポリネールは検閲官に言及しないが、制度には繰り返し言及し、常に批判的な態度を示している。検閲の対象となるのは、軍事機密、特に兵士たちの居場所についての記述だ。詩人は戦争の状況を自由に書けず、地名などを暗号で伝えたりしている。1915 年 8 月には手紙の封が一時的に禁止され、詩人は大いに憤慨する。検閲が文通の障害となるのは、手紙が検閲で止められる可能性があったり、手紙の話題が制限されたりするからだけではない。手紙が見知らぬ第三者に読まれるというだけで、詩人は不快に感じるのだ。

こうした制度ではなく、手紙の登場人物について考えてみよう。まず、特に役割を持たない些細な登場人物が、アポリネールの恋愛書簡には多数存在する。語り手は彼らに人格を与えず、その多くは名前さえ持たない。次に、詩人がニームや戦場で出会う何人かの兵士のように、物語においてある程度の役割を果たす登場人物がいる。さらに、詩人の恋愛関係に介入する登場人物がいる。しかし、どんなに深く恋愛関係に関わっても、こうした人物はそれだけでは単なる物語の登場人物であり、文通社会の外側にいるのだ。

「僕」や「君」だけでなく、第三者も文通に従事し、その時その人物は文通社会の一員となる。第三者は「僕」に手紙を書き、荷物を送る。実際、アポリネールの恋愛書簡は、詩人や画家、女友達、家族といった人々が彼に送った多数の手紙に言及しているのだ。こうした手紙のほとんどは、詩人の恋愛とは無関係な事柄を語っている。しかし、例えばジャン・モレの手紙は詩人のルーへの情熱を揶揄している。それより重要なのはマドレーヌの母親の例で、詩人の申し込みに応じて、彼女は彼と娘の婚約を承諾する手紙を書くのだ。

「僕」や「君」は第三者に手紙を書く。詩人は様々な人物に手紙を書き、その多くは詩人と愛する人の関係に何らかの形で関わっている。そのうち最も重要な手紙は勿論、マドレーヌの母親に宛てた婚約に関する手紙だ。また彼は、ルーの軍事地帯への旅行やパリ滞在の便宜のために、何人もの人々に手紙を書いている。ルーも様々な人物に手紙を書くが、詩人がマドレーヌの第三者への手紙に言及することは比較的稀である。彼女たちは時折、第三者に手紙を書くように詩人から忠告される。このようにアポリネールの恋愛書簡は大量の文通に言及し、それらは手紙の網を織りなしているのだ。

ルーへの手紙に登場する最も重要な第三者は、間違いなくトゥトゥだ。アポリネールはルーのもう一人の恋人である彼に激しく嫉妬し、苦しい三角関係を生きる。しかしここでは、文通社会において彼が果たす大きな役割にのみ注目したい。トゥトゥはルーと毎日のように文通し、詩人はそれを羨む。詩人はこの文通の内容に、特に彼らが自分のことをどう語っているかに興味を示す。また、トゥトゥは詩人とも時折文通をする。しかし、詩人はただルーとの良好な関係を維持するためだけに、この文通を行なうように見える。

トゥトゥは単なる手紙の書き手ではなく、詩人とルーの手紙の交換に直接介入する存在でもある。詩人のルーへの手紙は時折彼へのメッセージを含み、彼が詩人の手紙を直接読むこともある。また、ルーがトゥトゥに会うために旅行する時、ルーへの手紙は彼の住所に送られる。その時期、ルーの詩人への手紙は彼の手で投函される。さらに、このルーの手紙に彼が言葉を書き添えることさえあるのだ。このように執筆、投函、受け取り、読みと、文通の各段階にトゥトゥは介入している。詩人とルーの私的な文通は、少なくともルーがトゥトゥと会っている時は、現実には二人ではなく三人で行なわれているのだ。

トゥトゥ以外の人物も、アポリネールと愛する人の手紙の交換に介入する。そのほとんどは手紙の配達に関わり、詩人が相手に直接届けられない以上、

第三者による配達は必然である。しかし、詩人が時折自分の手紙や荷物を郵便担当下士官以外の見知らぬ人物に託していることは、無視できない。また詩人の手紙の執筆にも第三者は介入し、例えば他の兵士が覗き込んで執筆の邪魔をしたりする。また、頭部を負傷し入院すると、詩人は誰かに口述筆記をしてもらおうと考える。このように、様々な人物が文通を行なって文通社会を形成するだけでなく、「僕」と「君」の私的な文通にも、様々な人物が直接介入するのだ。

最後に、あるひとつの文通が描き出す文通社会は、現実の文通社会のごく一部にしか対応せず、故意の隠蔽もありうることに注意しよう。詩人は、ルーへの手紙で名前を出さずにマドレーヌに一度言及するだけだし、マドレーヌに対しても、ルーとの「友情」を一度告白するだけだ。また、彼女たちへの手紙はジャンヌ＝イヴ・ブランに全く言及しないし、この女性詩人への手紙にも彼女たちの名前は現れない。しかしながら、ルーとマドレーヌの存在は、アポリネールの他の友人との文通では決して隠されていない。特に、彼はルーとの関係を、時折歪曲を含めつつ様々な友人に説明している。詩人の恋愛書簡は、他の多数の書簡と何らかの関係を持ちながら存在し、手紙の交換にも直接第三者が介入している。それは文通社会のなかに存在し、この意味で愛する人との文通も社会的行為なのである。

結語

アポリネールの恋愛書簡が示す文通関係を、手紙の登場人物に注目しながら考察した結果明らかになったのは、彼の文通が孤独な行為であるとともに社会的な行為でもあるということだ。この両義的な行為のなかで、「僕」は不在の「君」と不安定な関係を結ぶのである。ルーとマドレーヌへの手紙を今日有名なものにしているその情熱的な恋愛言説や特異な詩的価値も、こうした文通関係の枠組みのなかで生まれたものなのだ。